鶴岡市立図書館・鶴岡市郷土資料館だより

# やまびこ 特別号 380号




## おすすめの本の本、のすすめ

読書の秋という言葉にぴったりの時期になりました。世の中には一生のうちに読み切れないほど数多くの本がありますが、みなさんは普段手に取る本をどのように選んでいますか？いつも読む興味のある分野の本、好きな作家さんの小説、とりあえず館内をぐるっと回って気になった本を…など、定番の選び方があると思います。ただ定番を繰り返すうちに、だいたいこの分野・この作家さんの本は読みつくしてしまった、次に読む本はどうしようというとき「ほかの人がおすすめする本、の本」はいかがでしょうか？

本の背表紙に貼ってある分類ラベルの左側にある大きい数字が黒色の 0、右隣りの小さく書かれた数字が 19 となっている、「019・読書/読書法」分類の本には、新しい本と出会う機会が沢山あります。

『宮部みゆきのおすすめ本 2020-2024』(宮部みゆき)や『米澤屋書店』(米澤穂信)、『私が食べた本』(村田沙耶香) など、作家さんが本について書いた文章を集めた本は、おすすめの理由やエピソードが見事な筆致でなんとも面白そうに紹介されていて、普段読んでこなかった分野の本も思わず読みたくなってしまいます。

他にも『まなの本棚』(芦田愛菜)や『あの人が好きって言うから…有名人の愛読書50冊読んでみた』(ブルボン小林)など、文筆以外の場で活躍する方々の読んだ本を知ることができるものもあります。あの人ってこんな本を読んできたんだ…普段こういう本は読まないけどこの人の好きな本なら読んでみようかな…など、新しい本に手を伸ばすきっかけになるのではないでしょうか。

そして、いろいろな方のおすすめ本を読んだら、自分の好きな本もおすすめしたくなってきませんか？図書館には『ビブリオクイズ』(笹倉剛)や『読書会という幸福』(向井和美)など、読書した後おすすめする側になりたいと思ったときに参考になる本も所蔵しております。読書の秋をいろいろな方法で楽しむヒントとして、是非ご活用ください。



**＝作家さんのおすすめ本の本＝**
- 『楽しい読書生活』渡部　昇一(2007)
- 『洋子さんの本棚』小川　洋子(2015)
- 『浮世道場』群　ようこ(2003)

**＝様々な場で活躍する方々のおすすめ本の本＝**
- 『答えは本の中に隠れている』岩波ジュニア新書編集部(2019)
- 『わたしの一冊』鶴見　俊輔［ほか］(2001)

**＝おすすめするときの参考本＝**
- 『本のＰＯＰをつくろう！』「本のＰＯＰや帯を作ろう」編集室 (2024)
- 『本が読めない３３歳が国語の教科書を読む』かまど(2025)
- 『ノンフィクションのビブリオトーク』笹倉　剛(2024)

令和８年１０月１日発行
鶴岡市立図書館・鶴岡市郷土資料館
〒997-0036
鶴岡市家中新町 14-7
（図）TEL：25-2525（郷）TEL：25-5014
FAX：25-2526

## 10月の新着図書　リクエスト・予約開始は 10月9日（金）です

**◎小説・エッセイ**
- 朝焼けキッチンカー(秋川　滝美)
- あの日のチョコレート（江國　香織）
- 印象・スケッチ　（井戸川　射子）
- 乙女道スカウト狩り(石田　衣良)
- 救われてんじゃねえよ（上村　裕香）
- 若冲、川を下る　（黒川　創）
- 失くしても、また（小手鞠　るい）
- 安恒　（今野　敏）
- ふしぎな凶器博物館(潮谷　験)
- とめどなくちいさき人へ（白石　一文）
- 残火　（辻堂　ゆめ）
- 腐魚の海　（月村　了衛）
- 泡　（辻　仁成）
- 絶遠の春　（堂場　瞬一）
- 暗殺の交響曲　（中山　七里）
- フィクサー　（真山　仁）
- 弾丸とヒマワリ　（箕輪　尊文）
- ギャルにひかれて寺マルシェ（宮島　未奈）
- 深川かたぎ　（山本　一力）
- 少年ABCの完璧な選択（結城　真一郎）
- 黒鳥　（横関　大）
- いろいろしあわせ(阿川　佐和子)
- 屁理屈と哲学　（小川　哲）
- ふじさん　（さくら　ももこ）
- しろとくろの偏愛　（千早　茜）
- 村井さんちのお取り寄せ（村井　理子）

**◎実用書**
- 生成AIのきほんとしくみ（岩田　宇史）
- 本のおかげで暮らしていける（津村　記久子）
- 信頼できるニュースって何？（奥村　信幸）
- ビジネスクラスで行く！50代からの世界一周旅行（あさみ　そう）
- AI推進担当になったら読む本（佐藤　傑）
- 採用を成功に導く面接官超入門（田中　和義）
- 豪雨災害から身を守る（牛山　素行）
- 図解がんとお金の話（黒田　ちはる）
- 乳がん女性のエスノグラフィー（菅森　朝子）
- おから大学教授が教えるすごい食べ方大全
- 世界の建物用語図鑑（中山　繁信）
- トコトンやさしいメイクアップ化粧品の本　（江連　智暢）
- 編み物好きが本当に知りたいきれいな仕上げのヒントとコツ
- 手編みで編みたいちょっと大きな子どもニット
- 堆肥と肥料の準備＆使い方
- アートがわかる！（西岡　文彦）
- 競馬の世界史　（本村　凌二）
- 逆転監督森保一　（木崎　伸也）

**◎児童書**
- はじめてのひこうきずかん
- 5秒でわかるカタカナ語図鑑
- ゆめのなかの名探偵(杉山　亮)
- オレたちとニャン、たった一日の冒険　（高森　美由紀）
- ことば医者　（高柳　克弘）
- もりもりの出版社（まはら　三桃）

**◎絵本**
- オオカミさんのおきゃくさん（鹿毛　トモタロウ）
- テオのりんご　（きたむら　えり）
- おしょくじちゅうごめんあそばせ（はらぺこめがね）
- でしいりすいぞくかん（コンドウ　アキ）
- おべんとうバスのころころりん（真珠　まりこ）
- ぼくの地球絵日記(鈴木　まもる)
- いろんないろみつけたよ（田中　千絵）
- パーチとマーチとフラワーさん（どい　かや）
- どんぐりずぎゅっ（秦　直也）
- おいもさん　（よしむら　めぐ）
- マザーツリー(シビル・ローゼン)

**◎紙芝居**
- ダンゴムシのだんぺいくん（いしもり　よしひこ）
- おつきみのどろぼう(苅田　澄子)

**＝10月の記念日＝**
**化石の日（１０月１５日）**

1904 年のこの日、アンモナイトの一種「ニッポニテス・ミラビリス」が新種記載されたことにちなみ制定（日本古生物学会公式サイトより）。

図書館にある「化石関連の本」
- 『ときめく化石図鑑』　土屋　香（2016）
- 『恐竜まみれ－発掘現場は今日も命がけ』小林 快次（2019）

新着図書は上記以外にもありますので、お気軽にお声がけください。
新刊は、ホームページでもご覧いただけます。

**やまびこ号の次回巡回日は**
**月　日です**

# 和歌の詞書から見える加藤忠廣の丸岡での日々

『徳川実記』第2篇（吉川弘文館　1976年）の寛永9年（1632）6月朔日の項に、加藤忠廣の改易について、以下のように記されている（以下、現代語訳）。

> 肥後国主の加藤忠廣において、その子豊後守光正が土井大炊頭利勝の討伐を企てるという内容の偽謀書を作った一件に同意していたのでは、という疑いがあったが、詮議の結果、全く関係はしていないことが判明した。しかしながら、忠廣の国元での治政が安定していれば、今回の一件はなかったことにして、光正を熊本に預けるということで収まっていたものの、忠廣自身、近年は不行跡であるとの噂もあり、将軍家光公の代替わりの年にも関わらず、無断で母子（側室の玉目氏とその子藤松・亀）を国元に連れ戻ったことは、幕府を蔑ろにすること甚だしい。本来は大罪に処するところ、この件の呼出に対し、速やかに出府し、隠すところなく、聞き取りに協力的だったので、その罪を減じ、肥後国は召し上げるが、その身は出羽国庄内の酒井忠勝に預け、一万石を堪忍分(扶持料)として与えることにする。また、光正は飛騨国の金森家に預けることとする。

こうした裁定を下され、忠廣は江戸から熊本に戻ることは許されず、家臣 20 人を含めた家来衆約 100 人と共に 6 月 4 日に江戸を発し、18 日には鶴岡に到着している。この先、忠廣にどういう命運が待ち構えているか、大いに気になるところであろうが、それについては、現在郷土資料館で開催中の「加藤忠廣と熊本城展」でたっぷり紹介しているので、どうぞそちらを御覧いただきたい（12 月 27 日まで）。

したがって、今回は展示であまり紹介しなかった、忠廣が詠んだ和歌を取り上げてみたい。忠廣は、大石田に到着した 6 月 16 日から、翌寛永10年（1633）9 月 8 日まで 319 首の和歌を詠んでおり、それを「塵躰和歌集」という私家集に仕立てていた。これらの和歌には、それぞれ趣意を解説する「詞書」が付されており、その中で時折、忠廣の日常を垣間見ることができる記述があるが、数多ある忠廣の関連本では、従来この「塵躰和歌集」の記述には注目していなかったように見られる。なお、この和歌集は承応 2 年（1653）6 月に忠廣が逝去して間もなく、加藤家の遺産と共に丸岡から幕府に送られ、その後、遺産は忠廣の娘である亀姫（後に旗本阿部政重の妻）が相続することになり、紆余曲折を経て、現在、徳川林政史研究所が原本を所蔵し、『金鰲叢書』第2輯（徳川黎明会　1975 年）に翻刻文が掲載されている。それでは、以下のとおり、列挙してみることにする。

- （寛永 9 年 12 月 21 日）丸岡屋敷内に「軒ば」と名付けた茶釜を設置する。
- （寛永10年 1 月 11 日）3 日に江戸へ出立した人が笹谷峠の奥、小坂まで着いたと使いで来た酒井家の竹内五兵衛が伝える。
- （同年 1 月 29 日）組頭の石原七郎右衛門が忠勝の使いとして、雁に似た鳥を持参する。
- （同年 2 月 3 日）茶を送ってもらうべく、壷 5 つを宇治に遣わしていたが、それが鶴岡に届いたので、家老の高力喜左衛門がそれを持ってくる。
- （同日）息子の藤松と娘の亀と共に、信濃に流された、愛しき妻の玉目氏からの便りが届く。
- （2 月 6 日）本證院という住職と古今和歌集について語らう。また、忠勝と奥方の仲の良さに対し、「隔ぬるさかひのゆきもけとけそめて　むめが香うつるにはの姫松」という歌を贈る。
- （2 月 7 日）家臣の加藤頼母方に国元から荷物が届く。江戸からは家老の末松吉左衛門が運んでくれたそうだ。
- （2 月 18 日）宇治から茶入りの壷が届く。
- （2 月 28 日）忠勝に紙はまだ残っている旨の文を遣わす。
- （2 月 29 日）田川の温泉に出掛ける。ツツジと椿を持って帰り、屋敷の庭に植える
- （4 月 5 日）一昨日の朝食で粟飯が出て悲しくなる。
- （4 月 14 日）この日も本證院と語らう。
- （4 月 18 日）鶴岡から訪問客があり。その人が丸岡を辞して、別の家に立ち寄った際、「忠廣公はいつか許され、世に出るらしいと世間では取沙汰されるようだ」と言ってたらしい。
- （4 月 25 日）空（から）の茶壷を宇治に送り、これに茶を詰めて送ってもらうよう手配する。
- （4 月 29 日）座敷の床の間に 3 人の名筆を掛ける。その内の一幅が藤原定家筆の「年ごとにきつつこゑするほととぎす　花たちばなやつまにあるらむ」となる。
- （5 月 17 日）忠廣に付き随ってきた医者の代わりが丸岡に到着する。前の医者は、しきりに京へ帰りたがっていた。
- （5 月 20 日）江戸に行ってた医者が丸岡に戻ってきた。
- （6 月 4 日）去年の今日、「うかりける所」（江戸）を出発して、みちのくの向かったものだと振り返る。
- （6 月 5 日）鶴岡の城下に行き、金の水入と蔓のついた花入れを買う。
- （6 月 24 日）父清正の二十三回忌を執り行う。
- （7 月 12 日）父清正と彼を取り囲む庄林隼人・森本儀大夫・坂川忠兵衛・並河志摩守・飯田角兵衛・三宅角左衛門らが夢の中に出てきた。そのうち、森本儀大夫が自分に何か言いたそうだった。

わずか 1 年弱の記述であるが、忠廣自身、茶を嗜んだり、田川の温泉に行ったり、鶴岡で買い物したり、配流の 1 年目にしては、比較的行動の自由度が高かったように思われる。また、妻の玉目氏からの書状が届いたり、宇治から茶を取り寄せたりと外部との交流の規制も緩かったようだ。注目したいのは、江戸のことを「うかりける所」（物憂い場所）と詠んでいる点である。この言葉は、彼自身、江戸はもう戻りたい場所ではなく、大名暮らしはウンザリだという心情を反映しているように思われる。なお、最後の歌となる寛永10年 9 月 8 日の記述を見ると、これで終わりとは到底思えず、おそらく「塵躰和歌集」には続きがあったが、残りの部分はどこかの段階で紛失したのではないかとつい想像してしまう。もし残っていれば、年経るごとの心境の変化などを和歌に託していたに違いない。

ところで、忠廣は以下のような漢詩も残している。

> 身似明星西又東　人間万事定不定
> 三十六年如一夢　醒来庄内破簾中（本住寺蔵）※「三十六年」を「三十一年」にしたバージョンもあり。

最後の句は、従来「醒め来りぬ庄内の破簾の中」、つまり、「夢から醒めてみれば、庄内で簾の破れた粗末な庵の中にいる」と解釈されてきた。しかし、これを「庄内に来て醒める。簾中を破ると」と読めば、「自分は庄内に来て自覚した。これまで自分を囲っていたすだれの内を破ったのだと」と解釈することも出来るわけである。実のところ、小林庄兵衛『庄内丸岡城址と加藤清正公忠廣公遺蹟』（加藤忠廣公遺蹟保存会　1940 年）によれば、当時の丸岡屋敷は 1 町 8 反余の面積があり、たしかに熊本城には遠く及ばないまでも、酒井家でもそれなり広さを備えた新築の屋敷を提供していたわけである。であるならば、大名という制約から解き放たれたことを庄内にきて実感した、と解釈するのも案外的外れではないだろう。詩情が湧いたとはいえ、「破れた庵」では、酒井家の好意もあったものではないだろう。

福田千鶴『御家騒動』（講談社　2025 年）によれば、改易の原因として、寛永 9 年正月に帰国した折、奥方に籠って酒宴を繰り返し、諫言する家臣も遠ざけたことが挙げられている。しかしながら、和歌の詞書からは、そういった「放蕩した殿様」という姿は見えて来ない。たしかに、和歌には「憂き身」という言葉が頻出し、一見、不遇を託っているように見えるが、丸岡での日々は忠廣にとって、そう悪いものではなかったのだろうと願いたいものである。

（今野　章）